

Virginia Woolf and the First World War

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2017-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畠山, 研, Hatakeyama, Ken メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24000

氏名	畠山 研 (宮城県)
学位の種類	博士 (文学)
学位の番号	甲第83号
学位授与の要件	学位規程第5条第1項該当
学位授与の日付	平成29年3月23日
学位論文題目	Virginia Woolf and the First World War
論文審査委員	(主査) 東北学院大学教授 植松 靖夫 (副査) 東北学院大学教授 箭川 修 (副査) 東北学院大学教授 遠藤 健一 (副査) 関西学院大学教授 横内 一雄

要旨

本稿は、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) の 1920 年代初頭から 1930 年代初頭の作品と第一次世界大戦の問題を考察したものである。本稿は、『ジェイコブの部屋』(*Jacob's Room*, 1922)、『ダロウェイ夫人』(*Mrs Dalloway*, 1925)、『灯台へ』(*To the Lighthouse*, 1927)、『波』(*The Waves*, 1931) を取り上げ、ウルフが第一次大戦の特徴の一つである大量殺戮、人を非人間化し、破壊することの危険と不安を描いていることを論じた。

Introduction では、ウルフと戦争を論じた先行研究を概観し、先行研究でウルフと第一次大戦の非人間化の問題についての考察がまだ不十分であることを指摘した。

Chapter 1 では、『ジェイコブの部屋』と大量殺戮を可能にするテクノロジーの問題を考察した。『ジェイコブの部屋』では、ジェイコブが大陸旅行で鉄道を利用する場面がある。そのとき、ジェイコブはイギリスから大陸までの移動が容易になったことに触れる。この出来事を例とする離れた距離の移動や通信を容易にするテクノロジーの発達こそ大量殺戮を生んだ一つの原因であるためにそれが作中で批判的に描かれていることを論じた。

Chapter 2 では、『ダロウェイ夫人』と女性たちの子を産むことの意識、そして帝国主義の問題を考察した。『ダロウェイ夫人』では、多産な女性サリーが自分の自慢である息子たちの話題に触れる。中産階級に育つその息子たちが‘enormous’であり、将来性ある若者であるとき、戦後の英国社会で彼らは失われた世代の代わりとなることが期待され、それゆえ新たな戦争を引き起こす主体となり、不安をもたらすことを論じた。

Chapter 3 では、『灯台へ』と無差別殺戮兵器の影響を考察した。『灯台へ』では、‘gunpowder’という言葉を用いるある作中人物が、自分の周囲の人々が爆発するさまをイメージする。そのイメージには、第一次大戦で兵士たちを破壊した砲弾の衝撃が重なり、兵士たちが無差別に殺戮され、非人間化され、「無名兵士」になったこと、また、さらには大戦勃発に付随する英国社会制度の崩壊の問題も潜んでいることを論じた。

Chapter 4 では、『波』とウルフの反戦意識を考察した。『波』では、作中人物バーナードが人の感性と想像力の可能性を強調する。それは、第一次大戦の殺戮行為のなかで失われたものでもある。それゆえバーナードの言葉を通じてウルフの反戦意識を考えることができると論じた。

Conclusion では、以上の議論をまとめ、第一次大戦をはじめとする大量殺戮、無差別殺戮が、現代の戦争、紛争、テロリズムなどありとあらゆるところにもいまだに潜んでいることから、第一次大戦を振り返ること、21世紀に過去の文学から戦争の問題を読むことの重要性を論じた。

以上

審査結果要旨

梶山研の博士学位論文 "Virginia Woolf and the First World War" は、20世紀初めのイギリス・モダニズム文学の代表的な作家 Virginia Woolf (1882-1941) の初期の小説で伝統的写実主義の小説とは異なるやや実験的要素の見られる *Jacob's Room* (1922)、意識の流れを克明に描写する *Mrs Dalloway* (1925) と *To the Lighthouse* (1927)、さらに象徴的な色彩の強い *The Waves* (1931) の四作品を取り上げて、作者と第一次世界大戦との関係を先行研究には見られない深いレベルで解明しようとしている。特に梶山はテキストの精緻な読解を通して、各作品に通底している第一次世界大戦のいわば *undertones* を丹念に拾い出し、しかも、それらの要素を微視的に捉えるのではなく、時代背景あるいは第一次世界大戦前後を生きる市井の人たちの潜在的な問題意識と結びつけて作品を読み解いている。

第1章では初期の小説 *Jacob's Room* を取り上げ、主人公の行動と言葉に注目して、鉄道体験が主人公 Jacob の参戦意識にもたらした影響を指摘し、戦争の規模と被害の飛躍的な拡大を招いた交通・通信の技術革命が Jacob の言行に影を落とし、しかもそれが作者の戦争批判へとつながっていることを明らかにしている。

つまり、産業革命により人間が生産手段と見なされ、人間性を奪われたように、その産業革命の延長線上にある「効率の良い殺人兵器」によって、標的にされる兵士は最早血の通った人間とは見なされない点、言い換えると、大戦が招いた「物象化」の問題に畠山論文は注目し、そこに作者 Woolf の戦争批判が重ねられていることを明らかにしようとしているのである。

第2章では兵士を生み出す母親としての女性の地位と役割に注目し、Woolf が *Mrs Dalloway* の中で再三言及する5人の息子の母親である Sally は、第一次世界大戦によって失われた若い男性の不足を補う必要性の象徴、さらに具体的に言うなら将来の戦争に向けて優秀な兵士を送りこむための供給源の象徴となっているが、Woolf が *Mrs Dalloway* の娘である Elizabeth を通してそのような古い女性観に対して feminist 流の批判を交えつつ、Sally が近い将来における戦争の可能性と恐怖を体現していることを明らかにする。

第3章では Woolf の代表作 *To the Lighthouse* を中心に、第一次世界大戦の影響を読み解く。これまでも作者 Woolf の意識の背後に大戦の影響が潜んでいるとの指摘はあり、屋敷を崩壊させる遠因としての大戦、あるいは Ramsey 家に集まる友人の一人である Lily が

小説の初めで描く意思を表明し、小説の最後で完成させる肖像画と小説自体の構成との関係、さらには戦闘との関わりなどについては研究されてきている。しかし、畠山はそこにこれまで殆ど注目されなかった要素を加える。すなわち、一見些細に見える登場人物の発言や描写に見られる表現に注目し、それが戦争とは関係のない単なる比喩として使われているのではないことを、物語の展開や作品の構成とも絡ませて、議論を積み上げてゆき、人物の意識の中でそれらが戦争と深く繋がっていることを明らかにしている。

第4章で論じられる小説 *The Waves* では直接第一次世界大戦に触れた部分はなく、登場人物たちも大戦を意識しているようには見えない。当然、研究者たちもこれまでせいぜい「戦後作」という扱いで、戦後のイギリス社会に対するファシズムの脅威との関係で論ずることはあっても、大戦そのものと直接結びつけることはほぼなかったと言ってよい。しかし、畠山論文は登場人物の一人である Bernard の独白に照準を合わせ、そこから感受性の鈍化、共感する心の喪失、さらに人間性の否定がじつは大戦によって引き起こされたことを、傍証を積み上げながら明らかにしてゆく。さらに、初期の *Jacob's Room* から *Mrs Dalloway* をへて、*To the Lighthouse* を

通り、*The Waves*に至る、それぞれテーマも手法も実験性も異なる作品でありながら、第一次世界大戦への強い意識によって繋がれていることを 'sensitivity' をキーワードとして、敵国の兵士を人間ではなく倒すべきモノとして捉える麻痺した感覚 (dehumanisation) や人間性の喪失、最前線の具体的な状況などが象徴的に取り込まれていることを浮かび上がらせている。換言すれば、象徴性の高い *The Waves* の中にもう一つ別のレベルの象徴が埋め込まれていることが解明されたことになる。そして、大戦で失われた人間的な感性や想像力の回復につながる登場人物の言行から、作者の戦争批判、反戦思想が読み取られる。

第一次世界大戦とは無縁に見える作品の中に戦争の影響を読み取り、これまで戦争との関わりが指摘されてきた作品の中には、さらに別のレベルの大きな影響を読み取ろうとする畠山の着眼点は秀逸であり、多くの先行研究を踏まえ、テキストに密着しながら、斬新な視点が決して牽強附会でも突飛でもなく、然るべき根拠があることを次々に提示して行く議論の展開も手堅くなされ、Virginia Woolf の研究分野に新境地を開くものである。英語表現には若干の瑕疵が見られるが、論旨は明快であり、議論の内容そのものは独創性に富

み、刺戟的である。

しかし、その一方でテキストの深層に潜む意味を掘り起こし、それらをつなげてゆく議論が時に粗雑になり、結論を急ぐ余り前提に恣意性が目立つ部分もある。また、論理的な一貫性を意識しすぎたがために、反って主張が単純すぎるように見えてしまい、論拠自体の説得力が弱化してしまう嫌いも時に目立つ部分がある。とはいえ、30年以上前の流行を未だに引きずり、ともすれば方法論と方法を混同し、議論が皮相どころかテキストそのものが読めていない若い研究者が相変わらず散見される昨今の状況の中で、畠山論文は歴史的社会的背景を踏まえながら、実証性の高い研究を展開し、Virginia Woolf 研究の分野でさらに新境地を切り開く可能性と将来性を窺わせるものであり、博士の学位を与えるに足る要件を十分に備えていると判断できる。

3. 最終試験の結果の要旨

梶山研の博士学位論文に対する最終試験は、2017年2月17日(金) 14時から16時まで本学土樋キャンパスにて行なわれた。梶山による論文要旨の発表の後、各審査委員から欠点の指摘と質問やコメントが出された。それらに対して梶山は自らの議論と説明の不足を認め、補足するための説明を行ない、意図を明確にした。

やや不用意な断定の仕方や議論の進め方、英語表現についての改善点が指摘されたが、テーマの設定や視点は審査委員にも影響を与えるほどの斬新さがあり、論文は全体として高いレベルにあることが認められた。また、審査委員の質問に対する梶山の回答は概ね適切なものだった。よって、博士(文学)の学位を授与するに値すると判断した。